

平日の

10/4(火) 14:00開演
東京オペラシティ コンサートホール

Tue. October 4, 2016, 14:00 Tokyo Opera City Concert Hall

The 2nd Weekday Afternoon Concert

第2回

午後のコンサート。

魅惑のモーツァルト

指揮とお話◎三ツ橋 敬子

Keiko Mitsuhashi, conduct & talk

コンサートマスター◎依田 真宣

Masanobu Yoda, concertmaster

モーツァルト:

歌劇『フィガロの結婚』序曲 (約4分)

Wolfgang Amadeus Mozart:

"Le nozze di Figaro" overture (ca. 4 min)

モーツァルト:

ディヴェルティメント 二長調 K.136 (約15分)

Wolfgang Amadeus Mozart:

Divertimento in D major K.136 (ca. 15 min)

— 休憩 Intermission (約15分) —

モーツァルト:

交響曲41番 ハ長調 K.551『ジュピター』(約31分)

Wolfgang Amadeus Mozart:

Symphony No. 41 in C major K.551, "Jupiter" (ca. 31 min)



主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団 / 助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra / Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

本日のマエストロ



©大杉 隼平

指揮とお話: 三ツ橋 敬子
Keiko Mitsuhashi, conduct & talk

東京藝術大学及び同大学院を修了。ウィーン国立音楽大学と
キジアーナ音楽院に留学。第10回アントニオ・ベドロッティ国際指揮
者コンクールにて日本人として初めて優勝。第9回アルトゥーロ・トス
カニーニ国際指揮者コンクールにて女性初の受賞者として準優勝。
併せて聴衆賞も獲得。第12回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。
これまでに国内の主要オーケストラへ客演する他、ヨーロッパでの
定期演奏会にも客演を重ねている。2015年1月、大阪交響楽団に
てカヴァッリーニ「ティンパニ協奏曲」(世界初演)を、同年9月に群
馬交響楽団創立70周年記念オペラ『蝶々夫人』、2016年1月に
三枝成彰作オペラ・『Jr.バタフライ』を手掛け、好評を博した。

本公演のポイント

解説◎柴田 克彦

- 1 ヴィーン古典派の天才モーツァルトの名曲集
- 2 オペラの序曲、弦楽合奏曲、交響曲……
3つのスタイルの作品
- 3 モーツァルトの10代と、円熟期・晩年の作品
- 4 『ジュピター』は天才の交響曲の到達点。
特に終楽章の構成に注目
- 5 魅力は、優美な旋律、歯切れ良いリズム、
密度の濃い構成

+1 プラス・ワン!

交響曲の
“ニックネーム”の
意味は何?

標題=内容を表すタイトルの付いた有名交響曲は、
ベートーヴェンの第6番『田園』が最初(マイナー作曲家
にはもっと古い曲もあります)。彼以前のハイドンやモー
ツァルトの交響曲のタイトルは、基本的に他人が名付
けた“ニックネーム”です。モーツァルトにも、第31番『バ
リ』、第35番『ハフナー』、第36番『リンツ』、第38番『ブ
ラハ』、第41番『ジュピター』とニックネームが付いた交
響曲が5曲あります。この内、バリ、リンツ、ブラハは初
演された町、ハフナーは原曲となったセレナードの依頼
者の名前で、いずれも音楽自体とは全く関係がありませ
ん。したがって、ギリシャ神話の最高神の名が付けられた
『ジュピター』は、曲のイメージと関連した唯一の例。そ
の点で、未来に通じる作品と言えなくもありません。

本日の作曲家

ヴォルフガング・
アマデウス・
モーツァルト
(1756-1791)



6歳のモーツァルト。ロレンツォーニ作*

“神童”モーツァルトの生い立ちと遍歴

モーツァルトは“ウィーン古典派”を代表する作曲家。同じ古典派の中では、ハイドンとベートーヴェンの間に位置しています。ヴァイオリン奏者で作曲家の父レオポルトのもと、現オーストリアのザルツブルクに生まれた彼は、5歳にして作曲を行い、8歳で最初の交響曲を書くなど、幼少から才能を発揮しました。また、父に連れられて、イタリアやウィーンはもとより、ロンドンやパリに至るヨーロッパ主要都市へ旅行し、神童ぶりを披露しながら、各地の音楽文化を吸収しました。

13歳でザルツブルク宮廷楽団の無給(その後有給に)のコンサートマスターとなり、主に地元の行事やコンサートのために数多くの作品を作曲しましたが、雇用主であるザルツブルク大司教コロレードとの関係が悪化。1777～79年には、母親と共に「マンハイム・パリ旅行」に出て、求職活動を行います。しかし成果は思わしくなく、旅行中にパリで母親が亡くなり、失恋もしました。ただこれは、人生経験を深め、当時の音楽都市マンハイムやパリで多くのものを得るなど、重要な旅行になりました。

1781年、大司教と完全に決裂し、ウィーンへ定住。1782年にはコンスタンツェと結婚し、ピアニスト兼作曲家として大人気を獲得します。その後は円熟味を加えた名作を多数作曲。しかし1791年、奇しくも「レクイエム」作曲のさなかに、35歳の若さで亡くなりました。

ちなみに映画「アマデウス」などで知られる、ライバル作曲家サリエリによる毒殺説に根拠はなく、研

究者からは病死とみなされています。また、晩年は作風があまりに深化したため(これは本当)、一般に受け入れられなくなって、借金に苦しんだといわれてきましたが、最近では実状とは異なるとの見方もなされています。

「フリーランス大作曲家」の先駆け

モーツァルトがそれまでの作曲家と大きく違うのは、ウィーン移住後、宮廷や教会に所属することなく、作曲、演奏、個人教師のみで生計を立てたこと。つまり大作曲家では初めてフリーランスで活動し、ベートーヴェン以降の在り方の先駆けをなしました。

作品の中で最も重要なのはオペラでしょう。特に円熟期の4大オペラ＝『フィガロの結婚』『ドン・ジョヴァンニ』『コジ・ファン・トゥッテ』『魔笛』は、それ以前の作曲家の作品とは比較にならないほど頻繁に上演されています。このほか、第35番から第41番に至るウィーン移住後の交響曲、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」をはじめとするセレナードやディヴェルティメント、オペラと並ぶ重要分野であるピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲やクラリネットなど管楽器のための協奏曲、弦楽四重奏ほか各種の室内楽曲、ピアノ・ソナタ、教会音楽など、残された名作はあらゆるジャンルに及んでいます。

彼の音楽は、伸びやかで美しい旋律にあふれています。同時に、大胆な楽器法や転調や和声が天才ならではの特徴。そして何より、絶妙に交錯する喜びと哀しみの情感が、聴く者を魅了してやみません。



モーツァルトの肖像(1789年作)*
*ザルツブルク国際モーツァルトウム財団蔵

楽 曲 解 説

モーツァルト:歌劇『フィガロの結婚』序曲

『フィガロの結婚』は、モーツァルト4大オペラの第1弾。ボーマルシェの戯曲に基づくダ・ポンテのイタリア語台本によって、円熟期の1786年に完成され、同年ウィーンで初演後、プラハで大人気を得ました。スペインのセビリアを舞台にした物語は、横暴で浮気者のアルマヴィーヴァ伯爵を、従僕フィガロや小間使いスザンナたちが協力してやりこめる……といった内容。フィガロとスザンナの結婚当日の様々な出来事が生き生きと描かれた、オペラ・ブッファ(喜劇的なオペラ)を代表する傑作です。

序曲は、劇中の旋律を用いることなく、オペラ全体の雰囲気凝縮した、コンパクトな逸品。ざわめくような低音の主題に始まり、明るく軽快な音楽が、終始快速テンポで繰り広げられます。

モーツァルト:ディヴェルティメント 二長調 K.136

モーツァルト若き日の佳品。1772年=16歳の年の前半に、3曲セットで作曲されたディヴェルティメント(K.136~138)の第1作にあたります。モーツァルトは、1769年12月~1771年3月と1771年8月~12月にイタリア旅行を行いました。この曲は、2回目の旅行から故郷ザルツブルクに戻って間もない時期に書かれた作品。急-緩-急の形をとるイタリアの「シンフォニア」(交響曲の起源のひとつ)に基づく構成と明朗な曲調に、その影響が感じられます。ただし作曲の経緯や用途はわかっていません。ディヴェルティメントは「自由な様式の器楽組曲」ですが、当時は晩餐のBGM的な用途がメイン。場を持たせるために多楽章で構成され、管楽器の使用が一般的でした。ですから、交響曲のような3楽章構成+弦楽器のみの編成による本作は、いささか異例の存在でもあります。

いずれにせよ、流麗で瑞々しい音楽はすこぶるチャーミング。彼の10代の作品中、最上位の人気を獲得し、弦楽合奏の重要レパートリーになっています。

第1楽章 アレグロ。 晴朗なメロディが流れる、澁刺とした音楽。

第2楽章 アンダンテ。 伸びやかに歌われる、美しい緩徐楽章。

第3楽章 プレスト。 飛び跳ねるような主題が愉しい活発なフィナーレ。

モーツァルト:交響曲第41番 ハ長調 K.551『ジュピター』

モーツァルト最後の交響曲。18世紀最高の交響曲とも称される名作です。彼のいわゆる“三大交響曲”は、1788年6月26日に第39番、7月25日に第40番、8月10日に第41番が完成されました。しかしこれら性格が異なる3曲が、わずか2ヶ月ほどの間に作曲された経緯は明らかになっていません。以前は「演奏のあてもなく、自己の芸術的な要請に基づいて作曲された」といわれていたものの、現在では、出版など何らかの目的のために書かれたとの見方が一般的。また、かつて主流だった「生前には演奏されなかった」との説も、作曲直後の筆写譜や書き込みのある演奏譜の存在などから、今ではほとんど否定されています。

『ジュピター』は、ギリシャ神話の最高神ゼウスのローマ神話での名前=ユピテルの英語読み。モーツァルトの命名ではなく、ハイドンをイギリスに招いたことで知られるザロモンが名付けたとされていますが、ギリシャ的な造型美と堂々たる風格を特徴とする本作に相応しいため、完全に定着しています。

この曲で最も重要なのは第4楽章。「ハーニーヘーホ」(C-D-F-E)の4音が精緻に立体化され、フーガ的な綾を成しながら、堅固に構築されていきます。これを著名な研究者アインシュタイン(有名な物理学者のひとこ)は、「音楽史上の永遠の一瞬」と称しました。

第1楽章: アレグロ・ヴィヴァーチェ。 ハ長調の主和音による力強い動きと弱音の応答による第1主題で開始。第2主題は柔和な趣をもっています。

第2楽章: アンダンテ・カンタービレ。 弱音器を付けた弦楽器が安らかな歌を奏でます。

第3楽章: メヌエット、アレグレット。 下降する主題に基づく主部に、簡潔なトリオ(中間部)が挟まれます。

第4楽章: モルト・アレグロ。 前記の壮麗なフィナーレ。

しばた・かつひこ(音楽ライター)/音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。